

2021年度 事業（活動）報告書

一般社団法人 OHANA

長引くコロナ禍により、今年度も感染症対策を徹底しながらの活動をしなければならなかった。人と人との繋がりが最も重要である「被害当事者支援活動」で、オンライン等の非対面のツールを取り入れ実施したが、限界を痛感した一年でもあった。

例えば、オンラインに対応する端末の値段が高額である事、また、オンラインツール使用時のデータ通信料が高くなってしまふ等の物理的問題である。その他、緊急事態宣言の発令や、感染者対応により、行政職員の人員不足による「相談窓口」に電話が繋がらない等の問題にも直面する事となり、「たらい回し」という二次被害相談がとて多くみられた。

しかしながら、この感染状況の中で、今までの様に「二次被害」と一言で片付けてしまう事にはあまりにも乱暴であると感じ得ないとも感じた。そうした様々な状況を鑑み、今年度は地味ながら、年齢、ケースを問わず、出来るだけ多くの人の「命を繋ぐ」という事に焦点を充てて、各事業に取り組んだ一年だった。

1 ものづくり事業

2 二次被害を回避できる在宅ワークでの就労支援事業

・「ものづくり」というツールを通して、自分自身の気持ちを「形」として表現していく場というだけでなく、就労技術講座の講師として、地域他団体、また地域の人達を招き交流する事で、支援者以外の人達との「繋がる」きっかけの場づくりを作ることができた。

・感染症が落ち着いたころに開催された小さな地域イベントにて、作った作品を展示販売する事で、一般の人達から思わぬ応援の言葉をもらい、勇気をだして就労に復帰しようという当事者もいた。

・キリン財団、赤い羽根共同中央募金からの助成金のおかげで、ものづくりのスペースを拡充し、アトリエに参加できる人数を増やす準備ができた。

3 傷ついた心を癒すためのトラウマ回復事業

・専門家（カウンセラー、臨床心理士、精神保健福祉士等）によるオンラインでのピアカウンセリング及び、カウンセリングを実施したが、先に挙げた問題により、複数回に渡るカウンセリングに繋がりにくかった。

・ものづくりに参加した際、「誰かと一緒に過ごす事」で、孤独な気持ちを和らぐことができるので、誰かと何かをつくりながら、何気なくかわす会話によって癒され、元気になる人

が多かったのはとても印象的だった。

4 法政大学と協働でソーシャルワーク研究会の立ち上げと運営。

・感染症拡大の状況の中、オンラインを使った「SW 研究会」をほぼ毎月実施する事ができた。(夏休み、年末年始除く) 参加してくれた大学生から、社会福祉の実習先での経験を発表してもらう事で、目には見えてこないところで、地域の人々を見守る公的機関が存在する事を知る事ができた。

・JT からの食料品の寄贈を頂き、法政大学の学生に協力してもらい、生活が困窮している方々に無料で配布する事ができた。(緊急事態宣言発令により、多くの若者がアルバイトできない状況となったため)

・キリン財団の事務局長を招き、「SW 研究会 スペシャル版」を実施する事ができた。研究会では、大学生の実習レポートだけでなく、CSR を推進している一般企業での取り組みや、人の心を引き出す「会話」について勉強する事ができた。

5 週末緊急宿泊シェルター事業

・行政などの公的窓口が休日となる土日、祝日でも宿泊することができる場所としての実施。その他には、緊急宿泊よりも、相談者が居住する行政担当窓口や医療機関、またワクチン接種会場への同行支援がとても多かった。